

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005 -2008

課題番号：17520150

研究課題名（和文） ヴィクトリア朝生体解剖論争の文化研究

研究課題名（英文） A Cultural Study in the Victorian Debate on Vivisection

研究代表者

丹治 愛（TANJI AI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

90133686

研究成果の概要：

ヴィクトリア朝英国における生体解剖をめぐる論争は、めざましい発展を示しながら唯物論化していったヴィクトリア朝の科学（生体解剖とはそのような科学の典型としての生理学が生み出した新しい科学的方法だった）と、18世紀後半以降、福音主義などの影響とともに発展していた動物愛護の文化が真っ向から衝突した事件であった。そのようなものとしての生体解剖論争のなかに、そしてその論争のディスコース圏のなかで書かれた多くの文学作品（たとえばウィルキー・コリンズの『心と科学』、H・G・ウェルズの『モロー博士の島』、G・B・ショー『医者ジレンマ』など）のなかに、われわれは、宗教性を離れて没道徳的に真実を追求しはじめた唯物論的な科学にたいするヴィクトリア朝人のさまざまな反応を見てとることができるだろう。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,300,000	0	1,300,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	450,000	3,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ヴィクトリア朝、生体解剖論争、動物愛護文化、文化研究、H・G・ウェルズ、『モロー博士の島』

1. 研究開始当初の背景

わたしはH・G・ウェルズの後期ヴィクトリア朝のSF作品を、その時代の歴史的コンテクストのなかで文化研究的に読む作業に関心をもっていましたが、『モロー博士の島』という、人造人間を主題とした作品を読んでいるとき、その作品が1870年代なかばから急に活発化しはじめた生体解剖論争と密接に

関連していることを発見した。

そして生体解剖論争が、あるいは生体解剖研究者というイメージが、『モロー博士の島』以外のこの時代の文学作品にしばしばとりあげられ、言及されていることも知った。それはいったいなぜなのか、そして生体解剖という言葉、あるいは生体解剖する科学者のイメージは、この時代にどのような文化的意味

を帯びているのか そのような疑問が、わたしが生体解剖論争の文化研究をはじめたきっかけだった。

2. 研究の目的

生体解剖論争は、18世紀後半以降発達してきたイギリスにおける動物愛護の文化と、動物実験を導入する唯物主義的な自然科学的文化的対立をあらわすものとして、ヴィクトリア朝人の動物観、科学観、宗教観などをかいまみせてくれる出来事だった。

本研究の目的は、18世紀後半以降の動物愛護文化の確立をたどりながら、それにとともなう新しい唯物論的な科学による動物実験への批判、さらに、そのような批判を前にした科学者側の反応を概観することによって、生体解剖論争の全貌を明らかにするとともに、ヴィクトリア朝の精神文化の一端を探究しようとするものである。

より具体的にいえば、(1)生体解剖に関連する後期ヴィクトリア朝の文学作品・歴史資料を収集読解し、ヴィクトリア朝生体解剖論争の全体像を明らかにする。(2)18世紀後半の時代の資料まで遡って、イギリスにおける動物愛護文化の歴史をたどりなおす。(3)ヴィクトリア朝とエドワード朝のいくつかの文学テキストを、生体解剖論争のコンテキストのなかで読解する、ということである。

3. 研究の方法

学際的な文化研究的方法をとる。すなわち、『モロー博士の島』を中心とするいくつかの文学作品と、この時代の歴史資料とのあいだを往還しながら、生体解剖にたいするヴィクトリア朝人のイメージを丹念に追い、その複合的なイメージのなかに、ヴィクトリア朝の精神文化の特質を探るということである。

そのために、生体解剖論争のなかで生み出された歴史資料を大量に収集した。また、とりあげた文学作品も、アナ・シューエルの『黒馬物語』、ウィルキー・コリンズの『心と科学』、オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』、ウェルズの『モロー博士の島』、『透明人間』、G・B・ショーの『医者のジレンマ』を中心として多岐にわたった。

そのような文学作品の解釈をつうじてヴィクトリア朝の心性を探究する歴史研究であるとともに、そのような歴史研究をつうじて文学作品の新しい解釈をめざす文学研究でもある、要するに学際的な文化研究であることを意図した。

4. 研究成果

産業革命が開始された18世紀後半、世界

観と自然観の唯物主義化が進んでいくとともに、そしておそらくはその結果として、ウィリアム・ジェイムズが「奇妙な精神的変容」と呼ぶ出来事が起こる。肉体的痛みの発見である。そしてそれは、動物の痛みにたいする感受性をも生み、また、産業革命の進展につれて機械が徐々に動物を一部の労役から解放していくとともに、動物愛護の文化をも生み出していく。動物と人間とのあいだの連続性を主張した18世紀末の進化論も、人道的行為を奨励する同時代の福音主義も、動物愛護文化の形成を下支えする働きをしただろう。

その結果、イギリスは1822年、世界初の動物愛護的法律であるリチャード・マーティン法を成立させ、世界初の動物愛護団体であるSPCA(動物虐待防止協会)を創設させる。その延長線上に、19世紀後半には「動物の権利」という、現代においてもまだ完全に認知されているとはいいがたい画期的な概念をも生み出すことになるのである。

その一方で、産業革命の進展の背後で、自然哲学と呼ばれていた科学はしだいに有用性を求めるようになり、テクノロジーとのむすびつきを強めながら、その分宗教とのむすびつきを失い、唯物主義化していく。そしてそのような唯物的な科学の発達はその以降の世界観と自然観をさらに唯物主義化させていく。その結果、たしかに国家に富をもたらす有用な科学は英雄としての科学者像を生み出しはしたが、それと同時に没宗教的な科学のありようは、宗教的・道徳的な動機を見失ったマッド・サイエンティストとしての科学者像をもつくり出していく。

科学者は英雄か、それとも狂っているのか。動物からの人間の進化をまったく唯物論的に説明するダーウィニズムが支配的な思想となった1870年代、そのふたつの立場は、実験動物に痛みを加えるだろう医学・生理学の新しい方法論としての生体解剖をめぐる、ついに正面から衝突する。動物のなかに人間的なもの、人間との連続性を認めるまなざしを共有する生体解剖派と動物愛護派というふたつの立場は、「残虐な」生体解剖の道徳的正当性をめぐって、動物にたいする人間の権利と義務をめぐる、それ以後現代にいたるまで終わることのない激しい対話をつづけているのである。

そのようなものとして生体解剖論争は、医学生理学者と動物愛護運動家のあいだでのみ展開された小さな論争だったのではない。それは著名な科学者や思想家、そして作家をふくめて多様なジャンルの人びとをも巻きこんだ広範な論争だった。そして社会全体に生体解剖論争のディスコース圏と言えるような特異な言語空間をつくりあげることになった。そこではさまざまなテキストのあい

だで、「生体解剖」という言葉が、それと関連する言葉とともに流通するうちに暗示的意味を増殖させ、社会的に交換されるうちにその意味を定着させていった。

と同時にそれは磁場にもたとえられる空間でもあった。というのは、その空間は、そのなかに住むあらゆる人びとの意識と無意識を、彼らの思想、感情、表現、行動を、つまりは彼らのテキストを、一定の方向に方向づけようとするイデオロギー的力を作動させている空間だったからである。ただし、どのような社会であれ、ひとつの社会には相互に対立する多様なイデオロギー的力が作動している。したがってひとつの社会をイメージするとき、われわれは単一の磁場が安定的に支配している姿ではなく、複数の磁場が相互に干渉しあっている動的な姿を想像したほうがいいだろう。

そのようなイデオロギー的磁場のなかに住む人がなんらかのテキストを織りあげるとき、彼が意識しているいないにかかわらず、そのテキストには一定の様子が織りこまれることになるだろう。もしもイデオロギー的磁場がさまざまなテキストのなかにそのような模様をつくりだすとすると、ひとつの社会のなかで織られるたくさんのテキストを横断的に概観したときに発見できる言語的模様という可視的なものから、そこに作動しているイデオロギーという不可視の力を想像的に再構築していくことが可能となるだろう。それが本研究がこころみたことにほかならない。

生体解剖論争のディスコース圏をながめることによって、そのなかにあらわれる言語的模様＝イメージをながめることによって、われわれはどのようなイデオロギーを認識できるのだろうか。要約的に言えば、それはヴィクトリア朝における科学と科学者をめぐるイデオロギーである。ヴィクトリア朝社会のなかで科学と科学者のまわりにどのような模様＝イメージが織りあげられ、その模様＝イメージはどのようなイデオロギー的力の存在をさし示しているのか。

とえあえず述べておくべきことは、ヴィクトリア朝における科学者像が英雄と狂人という両極端に分離していることからわかるように、ヴィクトリア朝における科学観はけっして一枚岩ではなく、光と影の両面をもつ陰影の濃い様相を呈していたということである。相互に対立する模様＝イメージの複数性と、その対立のなかからあらわれるイデオロギーの、予想外に微妙な肌理を理解するのに、おそらく生体解剖論争ほど格好の題材はないだろう。科学、宗教、倫理、思想、文学といったさまざまなジャンルにわたって横断的に展開された生体解剖論争のディスコース圏のなかに、われわれはヴィクトリア朝

における科学観と科学者像についての新しい認識を発見することになるだろう。

(1)「動物愛護と生体解剖」

18世紀末における痛みの発見から19世紀後半までの動物愛護運動の展開をながめたい。1870年代における医学生理学研究への生体解剖という「残虐な」(cruel)方法論の導入と、それにとまなう生体解剖論争の勃発、そして1876年における動物虐待法(Cruelty to Animals Act)別名、生体解剖法(Vivisection Act)の制定までの歴史的展開をおもに通時的に概観した。

(2)「H・G・ウェルズ『モロー博士の島』」

生体解剖論争のディスコース圏のなかで書かれた代表的なテキストとして、マッド・サイエンティストを主人公としたウェルズの古典的人造人間SF『モロー博士の島』をとりあげながら、世界観と自然観が唯物主義化していくなかで、宗教と科学のあいだの関係がどのように変容しつつ、それがヴィクトリア朝においてどのような関係にいたっていたのか、そしてそれがマッド・サイエンティストとしての科学者像にどのような影響をおよぼしていたかを概観した。

(3)「生体解剖論争のディスコース圏」

生体解剖論争のディスコース圏を共時的に概観しながら、ヴィクトリア朝の科学者像、とくにマッド・サイエンティスト像がその論争をとおしてどのようなものとして形成されていったかを詳細に検討し、さらにそのディスコース圏のなかに見られる、科学に有用性の徴を求める強迫的心理の存在を確認した。そのうえで、そのようなディスコースの特徴がヴィクトリア朝人のいかなるメンタリティを暗示しているのかを研究した。

(4)「ふたたびH・G・ウェルズ『モロー博士の島』」

モンゴメリという一登場人物に焦点をしばってこのSF作品を読解しながら、また、ウェルズとバーナード・ショーとのあいだで交わされた生体解剖をめぐる論争を解釈しながら、生体解剖と動物愛護にかんするウェルズの特異な立場を再確認した。そうすることによって、両者のあいだで最後まで優順不断な姿勢を維持しているウェルズの知性のなかに、生体解剖についての、というよりは有用性を増大させながらますます唯物主義化していく科学にたいする、ヴィクトリア朝文化の全体的反応の縮図を再確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

丹治愛、「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解 都市退化論と「土地に還れ」運動」、『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009年2月、pp. 115-134、査読なし

丹治愛、「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解への不満 貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い」、『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009年2月、pp. 135-155、査読なし

丹治愛、「進歩のなかの退化 H・G・ウェルズのSF、あるいは後期ヴィクトリア朝の光と影」、『夜想』ヴィクトリアン特集、ステュディオ・パラポリカ、2008年10月、pp. 150-157、査読なし

丹治愛、「ヴィクトリア朝生体解剖論争と『ドリアン・グレイの肖像』、『オスカー・ワイルド研究』第9号、日本オスカー・ワイルド協会、2008年3月、pp. 25-42、査読なし

丹治愛、インタビュー「ヴィクトリア朝を背景に誕生した『ドラキュラ』、『夜想』ヴァンパイア特集、ステュディオ・パラポリカ、2007年11月、pp. 162-175、査読なし

丹治愛、「後期ヴィクトリア朝におけるイングリッシュネス概念の成立」、『平成15年度～18年度 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究報告集』、2007年5月、pp. 167-82、査読なし

丹治愛、「都市を歩くこと 『ダロウェイ夫人』における文化と意志」、『ヴァージニア・ウルフ「ダロウェイ夫人」』窪田恵子編、ミネルヴァ書房、2006年11月、pp. 29-47、査読なし

[学会発表](計4件)

[シンポジウム]

丹治愛、真野泰、アルヴィ宮本なほ子、玉井暁、「英語を教えること、英文学を教えること」司会=丹治愛、日本英文学会第80回全国大会、広島大学、2008年5月25日

[講演]

丹治愛、「後期ヴィクトリア朝の科学批判」(日本英文学会北海道支部大会)2007年10月6日(土)札幌大学

丹治愛、「ワイルドの唯美主義と生体解剖」(日本オスカー・ワイルド協会全国大会)2006年11月25日(土)日本女子大学

丹治愛、「文化研究的文学研究の課題 『ダロウェイ夫人』をめくって」(名古屋大学英文学会クリスマスセミナー)2005年12月16日(金)名古屋大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

丹治 愛 (TANJI AI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 90133686

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし